玉川上水の由来（上）

講談師　一龍斎貞花

２０２４年10月号に「水」の話が。その中で水道水を飲めるが注意が必要な国の中にフランスや中国が書かれていなかった。55年前初めてパリへ、「水道の水直接飲むな」と言われていた。ホテルで「エビアン、ツウ急いでね」とフロントに電話するやすぐ届けられ相部屋の知人から、「貞ちゃんのフランス語すごいね」と笑われた。その後もパリでは水道水を直接飲まないようにしていたが、書かれていないところをみると今は大丈夫なのか。ワイン製造の地方は大丈夫だった。中国でもホテルの部屋に置いてある水さえ余り信用しないようにと言われたが、アイスキャンディーを気にせず食べていると、「煮沸してない水で作られてるよ」と言われ「アッ」。

能登半島では、地震に続いての洪水で今もって水に困っている所があり、横田基地の汚染水、重大なことだから発表せず隠そうとする。政府は市民のためにも発表すべきと思うが実におかしい。

お産には沢山の水がいる。手術には手を洗ったり器具も洗わなければいけない。透析にも水がいる。

飲料水、風呂、下水だけでなく医療にも沢山の水がいる。普段は当り前にして使用しているが水の大切さ。

日本の水源を中国に買われてしまっている所も、水道代云々となったら大変なことになる。土地も左様政府は対策を考えないと大変なことになる。

今回は、江戸の町づくりを支えた水について書かせて頂こう。

神田上水

天正十八年徳川家康が入城した江戸は農村、漁村地帯でまず水に困った。水がなくては暮しに困る。そこで大久保藤五郎に命じて井の頭から水を引かせたのが神田上水。褒美に金を与える余裕なく、名前をやる。以後主水（もんと）、水が濁ってはいけないから濁らずもんとと名乗れ、当時は名前を与えるのが勲章の一つでした。

その後参勤交代で武士が半数以上をしめ急激に人口増加で水が不足。対策として玉川庄右衛門、清右衛門兄弟に調査させていたが、「上水を作れば脇の道を通って江戸へ攻め込まれる恐れがある」と、老中たちが反対する中、家光とは腹違いの弟で四代家綱の後見役保科正之が、

「江戸市民が水が乏しくて苦しんでいます。用水を造れば万民安堵し、江戸の町は安泰となります。防火用水ともなり、上水左右に新田を開けば四十余の村を作ることが出来、作物も豊かになります」

民のための玉川上水開削を決断。いい官僚がいたんです。

八田與一が、台南に東洋一のダムを作り、日台友好の大きな要因です。

パキスタンのベシャワールに、中村哲医師が、約１６００本の井戸を掘り25キロに及ぶ用水路を建設、砂漠化した大地に緑を蘇らせた。惜しむらくは何者かの凶弾に倒されてしまった。

玉川兄弟は７５００両で請け負い、承応２年（１６５２）２月11日から工事にかかります。

玉川兄弟苦心談

ここからが講談です。

承応2年11月の末、江戸で大雪が降りました真夜中、麹町の大通りを流して歩くあんまがおりました。

「あんまさん、療治をお頼もうしたいがねー、此方だ、サ手を取ってあげるよ」

被っていた頭巾をとると、左半面に物凄いひっつりのあるあんまの顔でした。

「旦那、随分こってますねえ」

「歳は取りたくないもんだねえ、こることを覚えてね」

「まだお若いでしょ、32か3でござんせんか、広いお屋敷のようですが、ご商売なにしていらっしゃるんです」

「百姓ですよ」

「からかっちゃいけませんよ。麹町の大通りに百姓がいるわけねえじゃござんせんか」

「この土地の者じゃない。玉川の在方のものでね」

「それじゃ旦那庄右衛門さんと仰っしゃるんじゃねえんですか。弟さんは清右衛門と」

「こりゃ驚いたね、あんまさんには名前まで分るもんかねー」

「今江戸中で評判の旦那方ですからね、当てずっぽに」

「私共の噂を世間でしてますか」

「エー、旦那方ご兄弟の噂ですよ。でもほめてねえんですよ」

「世間の言葉には耳をかたむけ、悪い処があれば直さなきゃいかんと思っているんですが、どんな事言ってるか遠慮なく聞かしてくれませんか」

「旦那なんですってね、玉川の方から江戸へ水を引っぱってらっしゃるんですってね。あん畜生共は玉川のどん百姓、十里から先のあるものを引っぱれる訳はねえ。お上だまくらかしてふんだんに金取りやがって手前達のふところに入れてやがる。とんでもねえ野郎だと評判でござんすよ。人夫に勘定払わねえから人夫にが腹立ってね。そのうちにあいつらぶち殺されやがるだろうと。旦那その玉川の上水てえのは、出来るんですか、出来ねえんですか」

世間の噂を真に受けてか、半ばからかい気味に庄右衛門に。

「それじゃあね、本当の話をするから聞いておくれ。たとえ一人でも本当のことを知っておいて貰わないと、死んでも死にきれないよ。

天正十八年八月一日に権現様がご入国になって江戸の町を開こうとなすったが、一番先に困ったのが水だ。それでね大久保藤五郎という人に言いつけて井の頭から五里、莫大なお金とえらい力で引っぱってきたのが神田上水。ほっとしたのは小石川、本郷、掘割りを渡って神田の一角だ。四谷、赤坂、麹町、下町にかけては京橋、日本橋はどうにもならない。先の公方様の時にこれじゃ仕方がないから身分の上下に関わらずうまい考えがあったら申し出でろというお布令。私と弟は図取りをしたり目論見事をするのが好きで考えついたのが玉川から江戸へ水を引っぱることだ。すっかり歩き廻って図取りをして差出しといた。すると先の公方様がお亡くなりになって今の将軍様、江戸はいよいよ繁昌する、水は益々困ると、お奉行様神尾豊前守様からお呼び出しを受け、あれでやってみろと言われた時は本当に嬉しかったね。江戸何ん十万という人の命にかかわれるんなら命を放り出してもやろうと腹を決めましたよ。金はどの位とお尋ねを受けたからこれだけと申し上げたら即刻お下げ金だ。張り合いを込めて玉川の羽村から江戸へ水を引こうと工事に手をつけてみると、実際に仕事をした事のない手違いは大きいねー。三の一出来ない内に金がなくなりました」

当時のこと測量機械とてなく、土地の高低を測量するのに夜間提灯をつけたり、お線香を束にしてその灯りで何尺と高低を測量したと申します。

「目論見違いでしたとは言えません。そこでね自慢じゃないが、玉川で一といって二と下らない身代、畠、田圃、山を売り工事につぎ込んできました。それでもお奉行様から三度位はお下げ金を下すったかねー。それをつぎ込んでみたがはかどらない。金を借りに行っても世間の噂がそんなだから一文の貸し手もありませんよ。明日は晦日だろ人夫に勘定を払わなくっちゃならない。弟はこの雪の中金の工面に出て行ったが、あっしは心配でこりが肩へきてねー、どうにもたまらくて療治を頼んだとこういう訳なんだがね」

「世間の評判とは随分違いますねー、デ今どこまで来たんです」

「幡ヶ谷の不動の森まで引っぱってきましたよ」

「もうすぐじゃありませんか。江戸を目の前にした幡ヶ谷で」

「ここだ、仕事というものは九分通り出来たから、もう出来上がったも同じと思っちゃ仕上げがならないというのがやってみて分りましたよ。あと一分に初めと同じ力をいれなきゃ完成しないもんだとね」

この窮極をどう乗り越えるか。玉川兄弟の苦心とあんま松の市の義侠、次回連続に申し上げます。